

【た】 大事の前に小事あり、前ぶれに敏感になる

土砂災害は大量の降水や融雪、地震といった外からの作用を誘因としてはいますが、地山の状況、つまり体調が大きな素因になっています。地山はそう簡単には崩れたり滑ったりするものではないのですが、どこかに弱点があると誘因に負けてしまうというのが土砂災害となります。土砂災害には、崖崩れや土石流、地すべりといったものがありますが、発生するとその理由が見えるというわけです。災害が発生してからの調査によると、意外と兆候が見えてくることが多いことを経験しています。例えば、災害前に地割れがあった、湧水が新しく生じていた、樹木が傾いたり枯損が目立ってきていた、これまではなかった雨のたびに沢が濁るようになっていた、崖から小石が道路に落ちていることが多かった、道路に起伏が発生していたなどを聞きます。すべてが災害発生の前ぶれとはいかなくとも、少なくとも何か変化し始めているということではないかと思います。日ごろから、体調の変化を感じて、専門家の診断を仰ぐことが大切なことです。

【れ】 歴史は繰り返す、思わぬところにその足跡を見つける

大規模な自然現象による変動は地形となって我々に教えてくれています。また、人間は自然の中で暮らすようになってきてから災害と付き合うこととなります。先人は、この災害と闘いながらというか、避けながら世代をつないできたものと思われれます。そのために、災害は大昔から同じものは起きないが、似たことは起きるということで日記や書誌に状況を記録したり、口伝を残し、史跡やモニュメントというような形で災害対応を伝えてくれています。同じものが同じようには繰り返されないにしても、災害がなくなるということはありません。災害は一方的に負荷を作り出しているわけではなく、多くの恩恵も生み出しているの、自然のサイクルを無視しては暮らせないという一面を見ることとなります。

【ぞ】 素因がなければ、ことは起きない 卵に毛あり

何事も、原因にはそのもとになるものにきっかけが付加されて起きるもので、自然災害のもととは地形や地質といったものになります。その素因も、別の素因と誘因で生成されていますので、そのようなサイクルの中に人間が飛び込んで行って、様々な被害を受けるということになっています。ある意味では人間は自然にとっては、反逆者或いは異物扱いされていて自然は人間の行動に対して抵抗しているようにも思ってしまう。少なくとも、自然は人間を意識して活動するわけではありませんので、自然の流れを妨げずに上手に仲良く、苦勞を掛けないように心配りをして共生するようにしないとイケないということです。